

# 町花ハマナスを探る

和歌山 満



PL. 1 ハマナス

## 1. 指定花はまなす

海霧に煙る道東の海岸に、短い夏の到来を告げてくれるのは、強い香りと、艶やかな花をつけるはまなすを目にする頃であろう。

アイヌ暦で8月は、「シマウタチュプ」という。はまなすをたくさん採る月とされていた。はまなすは、アキタブキ、クロユリ、エゾウバユリ、ヒシ等と共に、数百年の昔から、アイヌの人達にとっては、重要な植物となっていた（釧路の植物）。

はまなすは、原生花園は言うにおよばず、北国の海岸砂丘になくてはならぬ代表種である。今日少なくなったとはいえ、PL.1に見る様な花が、厚内海岸にも点在している。豊北のトイドッキ浜から大津海岸の一帯では、小群落を形成する。

近年、道内でも、花木を市町のイメージにする風潮がたかまり、ツツジ、スズラン、シラカバ、

ナナカマド等が選ばれている。

はまなすが、北海道を代表する花に決定したのは、1978年であった。1986年には、町の花に指定され、豊北海岸草原入口には、案内板も設置してある（広報うらほる）。

現在、はまなすを指定花にするのは、2市6町で、Fig. 1 の通りである（自然ガイドブック）。

本稿では、浦幌町の象徴花の地位を与えられたはまなすについて、いくつかの知見を紹介してみたい。

## 2. バラ科植物ハマナシ

ハマナスの正式和名は、ハマナシで、浜梨と書

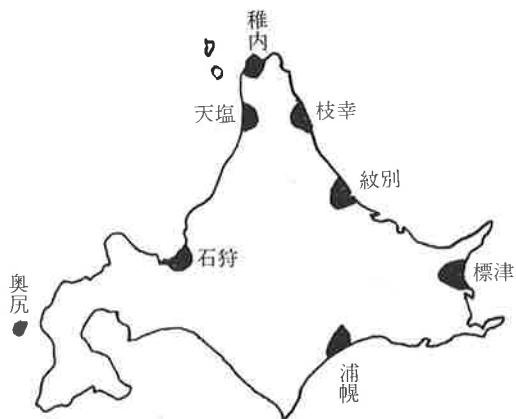


Fig. 1 はまなすを指定花とする市町分布

## 目 次

町花ハマナスを探る	和歌山 満	2
ベンチ状構造を有する擦文堅穴について	宮 宏 明	7
十勝太若月遺跡出土の勾玉状土製品	後 藤 秀 彦	15

**表紙写真説明：**この山は通称「円山」と呼ばれる小丘で、明治期の古地図などではトコムオロと記載されている。トコム・オロ(tokom-or)ぼこんと盛り上がったような山・の処)の意。(後藤秀彦)

いたりする。名前のいわれについては、諸説があって、興味深く思う。

ハマナシが正しいと主張するのは、植物分類学の大本山、牧野富太郎博士である。実の形からいうと、茄子より梨に近い為と説明された（北方植物園）。

水気が少なく、固くて、ほんのわずかに感じられる甘味や酸味から、梨に味方したい気がする。それも未熟な梨と言えそうである。

つまり、ハマナスは、ナス科というよりは、梨が属するバラ科の特色の濃い落葉小灌木である。

音声言語的には、ハマナシがなまってハマナスになったと言われている。とりわけ東北人は、シをスと発音するので、なまりが普及した結果、市民権を得た名前の例にすぎないと判断する訳である（国立科学博物館ニュース）、（野に咲く花2）。なまつた発音と、赤い果実を浜の梨に見たてた結合形として成立した命名と、とらえられないだろうか（北海道植物教材図鑑）。

『大和本草』という書物には、ハマナスの名がしるされている。

少しかわった例もある。豊北海岸草原にも自生し、フレップの名で親しまれているコケモモのことを、浅間山麓では、寒露梅、富士山麓では、なんとハマナシと呼んでいるのである（実用の薬草）。

漢名玫瑰花は、野生のハマナスをさしているというよりは、八重咲きの品種をあてている場合が多い。

少し混乱してしまったが、ちなみに、帯広市の某和洋菓子店の包装紙上の花絵柄中には、Pl.2のごとく、「はまなし」の記入がある。



Pl. 2 包装紙のはまなし

### 3. *Rosa rugosa Thunb* の特徴

ハマナスの学名は、ラテン語で、*Rosa rugosa*と書く。*Rosa*は古い、*rugosa*はしわのあるという意味である（野の花）。

緑濃い、光沢のある葉のみならず、五弁の花びらにも、よじれがあって、命名通りである。

花は、紅色ないし濃桃色、時には、淡色、または白色の個体変異もある。Pl.3は白花で、シロバナハマナスと呼ばれ、珍重している。



Pl. 3 シロバナハマナス

直径10cmにも達するみごとな花の中心には、黄色の雄しべが目立つ。

萼片は、針状にのびて、花びらより短い。

ここで、少し花の色についてふれておきたい。

花の色は多様であるが、花に含まれている色素

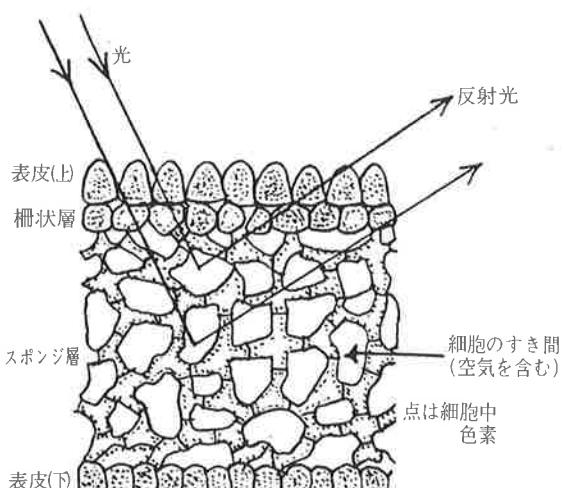


Fig. 2 花びらの断面と気泡反射

が母体となって現われる。Fig. 2 で、花びらの断面を見ると、色素は表皮付近に分布しており、一様ではない。シロバナハマナスには、有色の色素などなく、あってもごく薄い黄色の為、光のスペクトル吸収は弱い。白さの本体は、花びらの内部を構成するスポンジ状組織の細胞のすき間に含まれている小さな空気である。この気泡で反射した入射光が、我々の眼に白く見えているというわけだ（花の色の謎）。

一重の花の香りは、強い芳香を持ち、萼筒がふくれてできた果実は、球形、熟すと真赤になる。

果実の内部には、子房が発達してきたと考えられる毛を持った種子状のものがたくさん入っていて、通常食さぬ部分である。しかしながら、植物学的には、この部分こそ眞の果実で、実と称されている食用部は、偽果ということになる。ビタミンCを多く含む果肉は、数mmの厚さしかないので、食べにくかった記憶をお持ちの方も多いはずだ。戦時中は、航空用栄養食として利用されたと聞いて驚く。

羽状複葉で互生する葉は、小葉が卵形で7枚内外、長さ3cm位、鋸歯できちんと縁どられている（Pl. 1.3参照）

小刺を枝に密生させていることは、多分唯一の欠点かと思われる。

地上部は、2m位の高さであるが、地下では、茎を横にのばして、はうように繁殖する。後述するが、この性質が砂丘に群落を構成する要因で、移植に応用するとよい。

日本産自生バラ属中最大の花をつけるハマナスの道東における花期は、6月下旬から8月下旬までの長期にわたる。最盛期は、7月中旬で、果実は8月中旬から熟しはじめる。従って、花と果実が隣りあわせの株も珍しくない。

生育地は、もちろん海岸線に沿った砂地、砂丘がベースで、草地や丘陵地に及ぶこともある。

地理的分布を調べてみると、アジア東北部の海岸一帯、我国では、表日本が茨城・千葉県を南限とし、裏日本側は島根県以北となっている。これは偶然の一致と思われるが、河川そ上するシロザケの分布と相似で面白い（Fig. 6参照）。

道内では、石狩海岸、オホーツク海岸、根室風連湖付近と野付半島の群落が美しく有名である。

#### 4. ハマナスの生態

ハマナスは海のバラである。故に花のある所、昔は海辺であったと考えた人がいる。古環境を語る指標植物とみなした訳である。確かに、内陸には稀だから一理あるが、鳥が種子を運んだりするので、難しい問題にちがいない。

ハマナスのある所に砂丘が発達しているから、その逆も真であろうか。

地下茎を走らせた木が成長するにつれて、根元に砂がたまる。風で運ばれた砂が集積すると、枝はのびて砂を捕らえて吹きだまる。この繰り返しで、小高い砂丘に花咲くハマナス群落の景観が成立するのである（北海道自然の話）。つまり偽と答えねばならぬ。

さて、ハマナスは好きな所で生活しているのであろうか。一般には、次の様な言われ方をしている。水辺の植物は水辺が好きだから、海辺の植物は砂浜が好きだから、そこに適応して生育していると。そして、この種の考えに余り疑問をはさまなかつた。

ハマナスが美しいので、内陸に移植すると数年で、海岸に自生していた時よりはずっと大きくなり、花の数も多いみごとな株に育ってしまう。この現象は、庭先や内陸地の土壤有機物、水分、塩類、pH、光、温度や風等の外的要因が、生理的に適合していたことを示していると解釈できる。この様な生育域を、植物生態学では、生理的最適地と呼ぶ。

だが、実際には、かくのごとき環境条件のよい場所には繁茂していない。条件の悪い、厳しい海岸の砂地に限って、優占種として群落を形成しているのが常である。

つまり、種の混生でスタートする自然界では、種本来の最適生育域からはずれた立地条件に生育を余儀なくされると説明できる。こうした自然界での植物の生育域を、生態的最適地と呼んでいる（釧路川、その自然と生活）、（植物の我慢くらべ）。

そうすると、ハマナスは、恵まれた環境下における競争力の弱さ故に、本来の最適地からはずれた過酷な生態条件のなかで生き続けていると理解すべきである。

多くの針葉樹の天然分布を左右しているのも、不良環境に耐えて、我慢し続けるという性質で、広く樹木限界まで生育しているカラマツは、その例にあげられる（富士山）（森に学ぶ）。



Fig.3 浦幌周辺の植生

昭和48年、環境庁が行った第1回自然環境保全基礎調査による現存植生図の一部を、Fig.3に示した。浦幌町の海岸線に、ハマボウフウ、ハマゴウ、およびハマナス、クラスの砂丘植生が認められる。豊かな自然が生きていたからこそその記録である。

Fig.4は、厚内、豊北海岸の4例から、海浜植物の分布を一般化したものである（植物の生育と環境）、（十勝の自然を歩く）。ハマナスは、汀線から遠い安定帶に位置し、凸形砂質地に多く繁茂している。現在、厚内海岸一帯に占めるハマナス群落の面積は、筆者の記憶にあったそれと比べても消滅または縮小傾向にある。厚内川西岸ハマナスの丘、オコッペ海岸草原は前例、オトベ砂丘地は後例にあげられる。いずれも安定帶に相当する

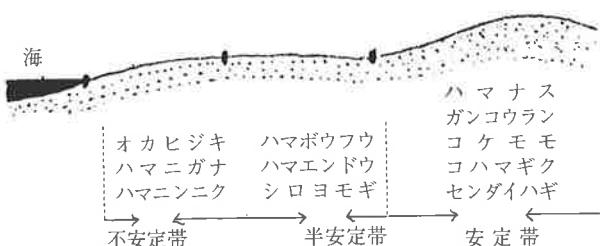


Fig.4 海浜植物群落の変化

面積幅が狭い地形上の理由から、土木工事や観光整地の影響を直接被る為と言える。

豊北の海岸草原の場合は、広大な湿性後背地が幸いして、未だにハマナス群落が残っている地帯である。

トイドッキの特徴は、ハマナスの間を埋めてしきつめるガンコウラン、コケモモ群落のみごとなことであり、その広さ、密生状況において注目されていた（豊頃村大津の海岸草原群落をみて）。

しかし、高山植物としての魅力が災いしてか、いたるところ盗掘されて、無残な光景をさらけ出している。シロバナハマナスの発見は、もはや不可能に近い。

ハマナスと共に、原生花園を代表するはずのエゾキスゲ、エゾスカシユリの2種類を欠いた特殊性を考慮するならば、ガンコウラン、コケモモ、シロバナハマナスを高密度に自生させておいてこそ、はじめて町花ハマナスが生きると考える。

## 5. ハマナス文化

バラ科の中でもハマナスは、品種改良の圈外にある。唯一の例外は、ヨーロッパに輸出され八重咲きになったハンザだけと聞いている。

町の木ナナカマドや大和心の代名詞エゾヤマザクラ同様、北国の庭園や公園を飾る小灌木として育てたいものである。刺が気になる方は、少なめ矮小の変種マイカイを求めるといよい。

栽培法だが、実から苗をとる方法がある。種子を蒔いて3年もすれば、立派な木になり、生垣に格好となるがどうであろう（野に咲く花）。

浜辺から木をとて移植すると枯れる場合が多いので注意が必要だ。ハマナス、ニセアカシは、掘り起こした根から発芽するほど萌芽力が強いの

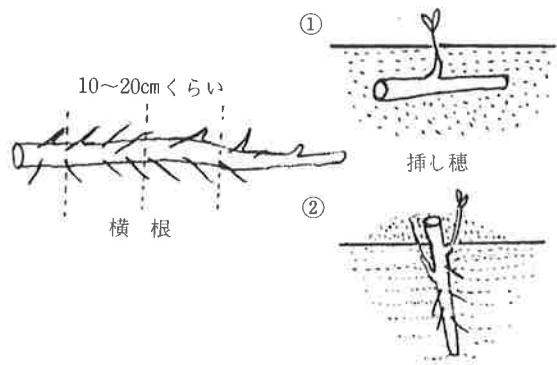


Fig.5 地下茎、根挿しの方法

で、根挿しでふやすのが一番と思える（挿し木・接ぎ木）。地下茎から、Fig.5①の様に逆T型短切片をとるか、さぐり掘りした細根のある若根からとった挿し穂を、②にならって育てると、根付きがよい。たとえ失敗しても、1本の根より沢山の苗木が確保できるため好都合である。

花は香水の王様と言われ、5弁花を500個集めるならば、約1gの天然香料が得られる計算になる。香水、オシロイ、チエック、オーデコロンに使われ、高級品である。合成香料を生かすには、必ず天然ものを少量添加するというから、ほんとうに貴重な物質を含んでいることになる。

花のジャムは、色あせて美しくないが、味の方は保証できる。アラスカやソ連邦の人々は、好んで実のジャムをつくり、食卓にのせている。かつては、糸を通した実を一錢で売っていた時代もあった（北海道の木の実草の実）。タンニンを含む根で染めた秋田八丈を知る人も少ない世である。

ハマナスには、実用薬草としての利用価値も知られていた。新鮮な花は、下痢止めや月経過多に、汁を歯齦の出血につけたりする。しかし、効能よりも、香氣を各種の薬剤に混入して矯臭薬とする副次的活用が主である（実用の薬草）。

華麗なる故か、ハマナスは、多くの詩人の心をとらえていた。石川啄木もその一人で、当時は、きっとハマナスが咲き乱れていた函館は、大森海岸の砂浜で、旅心をいやしたはずである。有名な歌に、「潮かをる 北の浜辺の 砂山の」

かの浜薔薇よ 今年も咲けるや がある。啄木と同時代の山城正忠は、友啄木を回顧して詠む。「この岬 啄木も来て 泣きけんと

おもふあたりに はまなすの咲く

北の浜辺に対する啄木のイメージは「磯の香は強く高く、砂をとって仔細に見れば、心は常に人生を思う」であった（青春の北帰行）。海・砂・岬にハマナスがつきものであることはすでに述べだが、何故か北の情景に合致していると感じるのは、筆者だけではあるまい。歌曲知床旅情や宗谷岬に詠まれているハマナスは、北のロマンとなり、広く人々の心に残るであろう。

## 6. 自然保護とハマナス

植物地理学上、北海道の東部や北部は亜寒帯ではない。Fig.6が示す様に、特殊な移行帶タテラキアになることを明らかにしたのは、北大の鶴勝博



Fig.6 植物区と北海道

士で、道東の森林や植物を愛し、一級の景観と認めた学者でもある（北方植物の旅）。

本年7月、釧路湿原は国立公園に決定、注目されている。道東の自然環境が、いかに貴重な財産であるかの証明でもある。

一般的の旅行者に、芸術家に、そして科学者にも異色ある風景として高く評価される海岸草原、その主要素であるハマナス群落が、近代的という不思議な言葉のもとで、さんざんな形相であることを指摘しておかねばならぬ。

私達は、原生花園の象徴花ハマナスを、自然を守ろうと言っている人間からの保護（原生花園と自然保護）という悲しい例にしてはいけない。町花の指定が、自然の真価を忘却しがちな我々に対する警鐘となれば、大層意義深いことである。

（千葉県松戸市立第一中学校教諭）

## 引用文献

- 朝日新聞社編（1968）北方植物園 朝日新聞社
- 浦幌町総務課編（1987）広報うらほろNo.425浦幌町
- 科教協北海道ブロック編（1986）北海道自然の

話、新生出版

教育社編 (1982) ニュートン 7月号マップ、教育社

釧路川共同調査団編 (1969) 釧路川、釧路市

国立科学博物館編 (1981) 国立科学博物館ニュース、150号、国立科学博物館

十勝の自然史研究会編 (1983) 十勝の自然を歩く、北海道大学図書刊行会

北海道新聞社編 (1984) 自然ガイドブック、北海道新聞社

山と渓谷社編 (1968) 野に咲く花、山と渓谷社

伊藤義治 (1973) 挿し木・接ぎ木、有紀書房

植田国夫 (1981) 浦幌町郷土博物館報告17号、植物の生育と環境、浦幌町郷土博物館

大政正隆 (1986) 森に学ぶ、東京大学出版会

館脇操 (1971) 北方植物の旅、朝日新聞社

栗原愛塔 (1967) 実用の薬草、昭和出版社

小松健一 (1987) 青春の北帰行、PHP研究所

佐竹義輔 (1967) 自然の手帖野の花、講談社

坂本直行 (1978) 北海道の木の実草の実、六花亭

田中瑞穂 (1962) 釧路市立郷土博物館館報No.12

9. 豊頃村大津の海岸草原群落をみて、釧路市立郷土博物館

——— (1963) 釧路の植物、釧路市

谷口弘一、三上日出夫 (1979) 北海道植物教材図鑑続野の花、北海道新聞社

宮脇昭 (1968) 科学朝日11月号、植物の我慢くらべ、朝日新聞社

———共著 (1971) 富士山、日本放送出版協会

明道博共著 (1972) 楽しい北国の庭と花づくり、北海道農業改良普及協会

安田齊 (1976) 花の色の謎、東海大学出版会

米司綾逸 (1983) 浦幌町郷土博物館館報告22号、原生花園と自然保護、浦幌町郷土博物館

## ベンチ状構造を有する擦文竪穴について

宮 宏 明

### 1. はじめに

ベンチ状あるいは、ベッド状などとよばれてい  
る一見、特殊な構造を有している擦文竪穴が少な  
からず検出されている。

本稿では、これらを比較検討し、擦文竪穴にお  
ける当該構造について若干考えてみたい。

この拙き原稿をまとめるにあたって御配慮いた  
だいた後藤秀彦氏をはじめ、御指導・御助力を賜  
わった岡田淳子・河野本道・大井晴男・沢四郎・  
佐藤忠雄・其田良雄・上野秀一・氏江敏文・鈴木  
邦輝・千代肇・西幸隆・大島秀俊・松谷純一・  
長谷川徹・瀬川拓郎・小野裕子・右代啓視・豊  
田宏良氏(順不同)他の諸先生・諸学兄に対し、  
心より感謝申し上げる次第です。

### 2. ベンチ状構造を有する擦文竪穴

#### の分布並びに時期

前述したようなプラットホーム状のベンチを有

する擦文竪穴が15遺跡(図1)、29例(表1)検出  
されている(註1)。やはり、当該期の遺跡が  
圧倒的に多く残っている道東・道北部に多数認め  
られる。表1のように浦幌町と枝幸町で検出され  
たもので半数を占める。

擦文式土器の編年に関する時期区分については、  
宇田川洋氏(1980)の分類に準拠したが、伴出  
土器が明確ではないものもあり、時期の判断は難  
しい。後期・晩期のものが多数(約75%)を占め  
るが、前期・中期に該当するもの(約25%)も少  
なからず認められる。

これまでに調査された擦文竪穴は、約800軒に  
のぼり、うち、当該構造を有するものは約4%で  
ある。今後とも検出例が増加することは確実であ  
ろう。より実態が明確化していくものと考えられ  
る。

### 3. ベンチの特徴とその分類

図2・図3のように従来の検出例より概略図を